プルードン考

別　府　芳　雄

まえがき

1980年6月3日（火）午後10時40分，本学園の總長・理事長・長戸路政司先生が気管支肺炎のため95才で，ご逝去された。謹んで哀悼の意を表するとともに，心から亡き總長のご冥福を祈る。今回，總長追悼記念号作成にあたり，寄稿を求められたため「プルードン考」を書いて追悼の言葉に代える。

さて，J.P.プルードンといえば，『所有とは何か』（*Qu'est-ce que la propriété? ou recherche sur le principe du droit et du gouvernement, première mémoire*. 1840）を書いた19世紀，フランスの社会主義的経済学者，社会主義理論家であり，「フランス社会主義者のなかでは唯一の，経済学に通暁した存在」であった。マルクスは，このプルードンの理論を〈否定の原基〉として，批判的に摂取しながら，しかもマルクスの思想体系のなかに骨肉化させていったのである。また周知のように，マルクスとプルードンの間で，「マルクス・プルードン問題」が起ったのだが，これまでの「マルクス・プルードン問題」の取り扱いをみると，「主として経済理論の領域で比較され，主としてマルクスのテキストによって（プルードンのテキストはほとんど検討されることなく），プルードンがマルクス経済学の形成の初期に何らかの影響をおよぼしたことがあるにしても……〔プルードンの理論〕は，理論以前の矛盾に満ちた，要するに非科学的・プチブル的なたわごとにすぎないと見做され」（西川長夫氏，。印引用者）

てきた。確かにマルクスは『哲学の貧困』（Das Elend der Philosophie. 1847）で，プルードンを痛罵し，プルードンは「頭のてっぺんから足の爪先までプチ・ブルジョアの哲学者・経済学者」として，口ぎたなく罵倒されたが——にもかかわらず——プルードンがマルクスに先立って，のちにマルクスが述べた論旨を「先取り」展開していた点が極めて多い。（この点については，あとで述べる。）マルクスの所論のなかには，プルードンの所論の「複写的相似性」さえ感ぜられるところがある。つまり，プルードンの着眼の先駆性がのちのマルクスに与える思想的影響が極めて甚大であることを感ぜざるをえない。だからマルクスとプルードン——「同等の出発点に立ち，なべて関心を同じくしたこの人物」（アルヴォン，。印引用者）が協力するのでなしに——決裂するまで争ったことは誰しも奇異に思うところであろう。小論は，この問題の真相究明が目的である。以下，問題の深部にメスを入れて検討してみよう。

Ⅰ．決裂直前までの両者の思想状況

マルクス・プルードン問題を論ずるに当って，マルクスの側とプルードンの側との双方から論ずるのが公平であろう。従来のように，マルクスの側からのみ，プルードンを検討するのは不公平な接近方法といわねばなるまい。以下，マルクスの側とプルードンの側から，決裂直前までの両者の思想状況を，同じスタート・ラインにおいて，比較検討してみよう。

1）マルクスが1843年10月末，パリに着いたとき，彼は共産主義への途上（auf dem Wege zum Kommunismus）にあった[1]」。マルクスは「社会主義について無知のまま，パリに着いた[2]」のであり，当時のマルクスは「社会主義については，はっきりした認識には達していなかった[3]」のである。それどころか，青年マルクスは，プルードンの31才時の著作『所有とは何か』（1840）に出会うまでは「疎外論的な問題意識のなかにあり，

〔観念〕の疎外から，〔物〕の疎外へと向う，その道筋において，プルードンの〔所有〕の疎外論にふれて感嘆を惜しまなかった[4]」のであり，後進国ドイツの知識人には，近代社会の基礎そのものを，私有財産の批判という視点から批判するという発想は未だ熟しておらず，「〈所有は盗みである〉(La propriété, c'est le vol) というプルードンの断定は……少くとも当時のドイツ知識人の企て及ばなかったもの[5]」であった。ドイツ知識人などの「企て及ばなかった」ことをプルードンが企てたのだ。だから「本書の真価を認めたのは，フランスに来たドイツの人たち……ローレンツ・フォン・シュタインやカール・グリューンとりわけ高く評価したのはマルクス[6]」であった。当時のマルクスは，経済学については，いわば素人だったのだし，エンゲルスの説明によると——ボンとベルリン大学でのマルクスの研究年月にふれて——「マルクスは経済学にかんしては，絶対に，何も知らなかった (von ökonomie weisste er absolut nicht)[7]。」という程度の状況（注．プルードンは，マルクスがまだベルリン大学の学生であった頃，早くも『所有とは何か』（1840）を公刊している点に注意）だったのだし，その後マルクスは1844年正月になって，「エンゲルスの『大綱』(Umrisse zu einer Kritik der Nationalökonomie)〔の草稿—筆者〕を読んで，はっきり啓示をうけ[8]」て，「市民社会の解剖学」(Anatomie der bürgerlichen Gesellschaft) の研究を始め，むさぼるように経済学の研究に沈潜していったのだし，その後，「1844年9月以降，しだいに親密になってゆく，エンゲルスとの協力[9]」のおかげもあって，その努力は『神聖家族』『ドイツ・イデオロギー』などの成果となって結実していく。だがしかし，『神聖家族』（1845年2月公刊）は「的確にいえば，経済学の専門的問題に答えてはいない。また，マルクスとエンゲルスの経済思想の進展という観点からいえば，むしろこの書は副次的なもの[10]」にすぎず，つまり，1845年の段階でも，マルクスは「経済学の専門的問題に答えていない」のだ。また『ドイツ・イデオロギー』にしろ，「唯物史観誕生の書」

として，はじめて「史的唯物論を基礎づけた書物」には違いないが，ここでも「本来の意味での経済学にかんする文章は，ここではあまり多くみあたらない。その数少ない経済学にかんする章句も，マルクスがすでに『手稿』の〈国民経済学批判〉で展開した事柄をおおむねふたたびとりあげているにすぎない」[11]ものなのである。『神聖家族』などでは「批判的な」ドイツのイデオローグたち，つまり「プルードンをいい加減にしかよまないで，明らかに正確な翻訳さえおこなえない者どもから，プルードンを擁護している」[12]点さえみられる。つまりマルクスは，はじめはプルードンをお手本と感じていたことは確かで，しかもマルクスはプルードンの『所有とは何か』（1840）を「読んでのち，かなり経ってから同じ結論に到達」[13]していくわけだから，a）プルードンが問題意識において，きわめて優れた思想家であったこと，b）遙かにマルクスに先んじていたこと，この2点は確実に断言できる。ともかく「プルードンとマルクスという2人の天才が，のちに社会主義として知られるようになる思想について，社会哲学・政治哲学・経済哲学の領域から，その実践や形式をあたえることになる方途を探究」[14]する道に踏み込んでいくことになる。

2）他方，プルードンはどうか，といえば，彼は1840年に早くも『所有とは何か』を公刊しており，「このパンフレットは当時31才であった，その執筆者の名声を確立」[15]していた。もともとプルードンはフランスの東北，フランシュ・コンテ（Franche-Comté）州のジュラ（Jura）地方のブサンソン（Besançon）の田舎で，貧困なビール醸造兼樽製造職人を父とし，農民出の料理女を母として，貧困に生れ，貧困に育った人物ではあったが，すでに29才時に『一般文法論』（*Essai de Grammaire Générale*, 1837）という小冊子で，ブサンソン・アカデミーからシュアール夫人の奨励金（しょうれいきん）（3ケ年，1ケ年1500フラン）を受けたくらいの非凡な才能をもった努力家で『日曜礼拝論』（*De la célébration du dimanche*. 1839）にしても，「ブサンソン・アカデミーは，日曜礼拝について，この論文に賞

を提供した[16]」くらいで，カソリック百科全書（Encyclopédie Catholique）にも，数種の神学的論文を寄稿している。経済学者ペレグリノ・ロッシ（Rossi. p）が彼に経済学を指導した。ロッシの指導の成果が，この『所有とは何か』（1840）であった。本書で「彼が〈財産とは盗みだ〉といった言葉が，19世紀の偉大な政治的標語の一つになって，プルードンの一般像が〈象徴的な信天翁〉（symbolic albatross）のように[17]」広く，フランス国民に印象づけられたし，1842年の『財産所有者たちへの警告』（*Avertissement aux propriétaires ou lettre à M.V.Considérant, rédacteur de la phalange, sur une défense de la propriété.* 1842）などは「実際に非常に衝撃的だったので，ルイ・フィリップの政府の行動をたちどころに招き，そしてプルードンは公共の安全に反する種々の罪で起訴された[18]」ことさえあったくらいで，プルードンはすでに「当時のフランス社会主義者のなかでは経済学に精通した唯一の思想家として注目されるに至って[19]」いた。プルードンが高等中学（collège）を中退（1827年）して，印刷工として働いていた頃（18才時），「かれはシャルル・フーリエ（Charles François Fourier）の著作に接する。かれが最初に出会ったフーリエの著作とは，『産業的・組合的新世界』（*Le nouveau monde industriel et sociétaire*）であり，1829年にそれが印刷される過程においてであった……プルードンが最初にフーリエの洗礼をうけたことの意義は大きい。というのは，プルードンはそれによってフーリエから2つの重要な遺産を継承したからである。その一つは，かれに深い感銘を与えた〈系列série〉の理論であり，他の一つはその経済学批判を含む商業社会の分析[20]」だったが，校正者として読み終えたプルードンは「6週間もの間，わたしは，この奇妙な天才のとりこになった[21]」といったくらい，フーリエの洗礼をうけたことの意義は大きい。（小論のⅡにおいて，見られるような重要な意味をもつ。）プルードンがマルクスに会ったのは，1844年10月から1845年2月1日までの間である。マルクスがパリに来た1843年10月末

には，プルードンはリヨンで河川運送会社の事務に従事していた。ゴーチェ兄弟社（La maison Gauthier frères）の事務員だった。1844年9月25日に，プルードンはパリにやってきて，翌年の2月末まで滞在していた。(マルクスがパリを去ったのは1845年2月1日)。だから2人が遭遇したのは，1844年9月25日から1845年2月1日の間しかないという計算になる。しかもプルードンは1843年10月頃には，『人類における秩序の創造』（*De la création de l'ordre dans l'humaité, ou principes d'-organisation politique*, 1843）を公刊し，本書で「経済学を〈真の科学〉とよび[22]」社会の分析を経済学に求め，人類の秩序形成について，「その進歩の歴史を経済の法則によって把握する社会科学への道を展望[23]」していたくらいで——この事実は，歴史認識の流れの中できわめて新しい前進である[24]——プルードンはすでに34才を迎えていた。

プルードンの文章についていうと——彼の文章は力づよく，説得力のある文章で，「彼の力強い文章は，ボオドレール（Baudelaire）やフローベル（Flaubert）さえ賞賛[25]」したくらいの名文章といわれ，たとえばフロベールなどは「優しさと熱誠にあふれたプルードンの文体の崇高な活気[26]」という表現を使ったくらいだし，のちには，ロシアの文豪トルストイ（L.N.Tolstoy）をして「彼の最大の小説の題名をプルードンの『戦争と平和』（La guerre et la paix）から借りさせたのみならず，『戦争と平和』の中に，戦争と歴史の性質に関する多くのプルードン的見解を織り込ませた[27]」というくらいの説得力のある，力づよい文章であった。さらに彼の文章が人びとを捉えたのは，「そこにもりこまれた挑戦的な表現や，人の意表をつくレトリック，とりわけ逆説のせいであった[28]」といわれる。しかも彼の「逆説的表現は，対抗的な思考方法としての重みをもち，その重みで，人びとを〈彼に近づかしめ〉，社会通念のかたよりにおのずから平衡をとりもどさせる。〔そして〕彼のことばでいえば〈ジュスティス〉(Justice）を実現[29]」していくことになる。だからプルードンの文章の巧み

さ，とくにその逆説的表現には，そんな効果さえあったようである。たとえば，『所有とは何か』で，彼が「所有とは盗みである」といったことは，逆説的表現であり，その重みで人びとを〈彼に近づかしめ〉，彼の求めている個人的占有（la possession privée）を導出する表現方法なのである。また『経済的諸矛盾の体系または貧困の哲学』（1846）（*Système des contradictions économiques ou philosophie de la misère*. 1846）で，神（Dieu）の仮説（l'hypothèse）から始まって，「神＝必然性」が仮設され，そして「神，それは悪である」（Dieu, c'est le mal）ということも，逆説的表現である。というのは「プルードンは決して真の無神論者ではなかった（was never a true atheist）[30]」からであり，「神は悪である」という表現によって，人びとを〈彼に近づかしめ〉ておいて，彼は神の摂理としての宿命（必然性）が悪である以上，人間こそ，自由の現実化の主体であるべきだ，という論旨に導いていく。結局は平等（平等＝正義の論証をしてのち）が，社会の至高の法則（la loi suprême）なのだから「正義と人類が結びつけられるところにプルードンの真の神（un véritable dieu）が存在する」という逆説的表現となってくる。「貧困は悪である」というテーゼを掲げることによって，「悪としての貧困」を克服する「貧困の哲学」は，当然に取りあげられ，検討さるべき問題となるから，悪の反面たる正義つまり，正義こそ「社会を支配する中心の星であり，そのまわりに政治の世界が回転する極[31]」として，正義（justice）の実現に導いていく，という表現方法をとる。だからウドコックは「プルードンは逆説の玄人（connoisseur of paradox）だ[32]」とさえ述べているくらいである。

3）マルクスはパリに来る前に，すでにプルードンの31才時の著作，『所有とは何か』（1840）を読んで，プルードンの思想に注目していた。だから『ライン新聞』時代のマルクスが1842年10月16日付（第289号）で「共産主義とアウグスブルグ《アルゲマイネ・ツアイトウング》（Der Kommunismus und die Ausburger "Allgemeine Zeitung"）」と題して「し

かしルルー（Leroux）やコンシデラン（Considérant）の著作，とりわけプルードンの明敏な労作のような著書（vor allen das scharfsinnige Werk Proudhons）は，そのときどきの皮相な思いつきによってではなく，長期にわたる深遠な研究のあとで，はじめて，これを批判できるものだ[33]」と述べ，プルードンの著作を「明敏な労作」と讃えているし，また1844年8月末から11月初めにかけて執筆した『神聖家族』（Die heilige Familie）の「批判的傍注．第1」（Kritische Randglosse. Nr 1.）では「プルードンの著作『所有とは何か』も経済学の立場からする経済学の批判である[34]」と述べたのち，「プルードンは経済学の基礎たる私有財産に，批判的検討を，しかも最初の決定的な，遠慮のない，それと同時に科学的な検討をくわえる。この点は彼がなしとげた大きな科学的進歩であり，経済学を革命し，真の経済学を，はじめて可能とした進歩である。プルードンの著作『所有とはなにか』はシェイエス（Sieyès）の『第3身分とはなにか』（Qu'est-ce que le tiers état?）が近代政治学にたいしてもったのと，おなじ意義をになっている[35]」と讃美し，それどころか「批判的傍注，第2」（Kritische Randglosse Nr Ⅱ.）においては「これまでの経済学（Nationalökonomie）は，私有財産の運動が，あたかも国民のためにつくりだしているとされる富（Reichtum）から出発して，私有財産を弁護する考察（apologisierenden Betrachtungen）に達している。プルードンはこれと反対の，経済学では詭弁的にかくされた側面（sophistisch verdeckten Seite），私有財産の運動によって，つくりだされた貧困（Armut）から出発して，私有財産を否定する彼の考察に達している[36]」と述べて，プルードンを「惜しみなく賞賛」（generous praise）したくらいだった。だからルイス（J. Lewis）は「マルクスはプルードンのこの著作を惜しみなく賞賛し，それが労働者階級の運動に大きな衝撃を与えることを認めた。その衝撃（impetus）は，事実，マルクス自身にも明らかな影響力をもつほどのものであった。だから，かれは，この著作を経済学の分野における先駆的

偉業，現代プロレタリアートの最初の科学的宣言（scientific manifesto）とみなした[37]」くらいだと説明している。

ところがマルクスのプルードンに対する，この賞賛は3年後の『哲学の貧困』では，180度大きく旋回して，プルードンは完膚ないくらいの痛裂な批判を受けることになり，ここでプルードンとマルクスの友好関係は全く断え，両者の関係は決裂してしまう。プルードンが『経済的諸矛盾の体系，または貧困の哲学』を公刊したとき，プルードンはマルクス（当時ブリュッセルに亡命中）に一書を献じて，その批判を求めた。ところが，その批判たるや「プルードンの期待に反する激烈なものであった。『貧困の哲学』はいまや『哲学の貧困』の書名どおりの痛烈な皮肉と罵倒に近い鋭い批判[38]」によって，むくいられることになってしまった。たとえば――ほんの1例だけを紹介すると――マルクスは『哲学の貧困』の「第7の最後的考察」（Septième et dernière observation）で次のようにいう。「彼は綜合でありたがる。だが彼は合成された一誤謬（une erreur composée）である……彼は，資本と労働のあいだを，経済学と共産主義のあいだを，たえずうろつくプチ・ブルジョア（le petit bourgeois）であるにすぎない[39]」と。

このようにマルクスは口ぎたなくプルードンを論駁してはいるが，南亮三郎博士のいわれるように「しかし大事なことは，この批判においてマルクスはプルードン学説中の最も肝要な部分たる窮乏化理論には全然手をふれなかった，という点に注意することが肝要[40]」であろうし，佐藤茂行氏が述べておられるように――批判の量的構成からも――つまり『貧困の哲学』を「構成する14章のうち，マルクスがもっとも重点的にとりあげているのは，第2章の〈価値について〉であり，これはプルードンの全2巻の書物のなかでは約5％の量をしめるにすぎない。これにたいして，この章のマルクスの批判は『哲学の貧困』では，約半分以上を占めている[41]」という批判の量的構成上の不条理がある点も予め承知しておく必要がある。

いったい，マルクスはなぜこんなに激怒しなければならなかったのか。次節でその真相を解明しよう。

注 1） W.Blumenberg: Karl Marx, Rowohlt Taschenbuch Verlag Gmbh, Reinbeck bei Hamburg, 1962. S.50. 邦訳63頁。

2） J.Lewis: The Life and Teaching of Karl Marx, Lawrence & Wishart, London, 1967. p.44. 邦訳57頁，◦印引用者。

3） ibid., p.42. 邦訳53頁。◦印引用者。

4） 河野健二「プルードン主義の背景」(『プルードン研究』岩波，1974，4頁所収)，◦印引用者。

5） 同上47頁，◦印引用者。

6） 長谷川進，解説「所有とは何かについて」(『プルードン』Ⅲ，1976年，三一書房，303頁所収)

7） E.Mandel: Entstehung und Entwicklung der ökonomischen Lehre von Karl Marx, Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt am Main, 1968, S.7. 邦訳9頁，◦印引用者。

8） ibid., S.23. 邦訳33頁。

9） ibid., S.23. 邦訳34頁。

10） ibid., S.31. 邦訳42頁，◦印引用者。

11） ibid., S.33. 邦訳44頁，◦印引用者。

12） ibid., S.32. 邦訳43頁，◦印引用者。

13） Edward Hyams: P.J.Proudhon, John Hurray (Publishers) Ltd, 1979. p.3.

14） ibid., p.1.

15） ジェームズ・ジョル『アナキスト』萩原，野水邦訳，1975年，岩波書店，63頁。

16） G.Woodcock: Anarchism, New American Library, 1962. p.112. 邦訳158頁。

17） ibid., p.113. 邦訳160頁。

18） ibid., p.117. 邦訳103～104頁。

19） 佐藤茂行『プルードン研究』木鐸社，昭和50年54～55頁，◦印引用者。

20） 同書，54頁，◦印引用者。

21） Hyams, op. cit., p.5. ◦印引用者。

22） 今村仁司「プルードンの歴史観」(『プルードン研究』224頁所収)

23） 同上225頁，◦印引用者。

24） 同上230頁。

25） Woodcock, op. cit., p.108. 邦訳 153 頁。
26） 竹内成明「プルードンのコミュニケイション論」(『プルードン研究』244 頁所収)
27） Woodcock, op. cit., p.108. 邦訳 153 頁。
28） 竹内成明，前掲論文 244 頁，。印引用者。
29） 同上，　　〃　　245 頁。
30） Woodcock, op. cit., p.123. 邦訳 172 頁。
31） ibid., p.109. 邦訳 154 頁。
32） ibid., p.106. 邦訳 150 頁。
33） M.E.W. Bd 1. S.108.『全集』第 1 巻 125 頁。
34） M.E.W. Bd 2. S.32.『全集』第 2 巻 28 頁，。印引用者。
35） ibid., SS.32～33. 同書 29 頁，。印引用者。
36） ibid., S.36. 同書 31 ～ 32 頁，。印引用者。
37） Lewis, op. cit., p.92. 邦訳 127 頁，。印引用者。
38） 坂本慶一『マルクス主義とユートピア』紀伊国屋新書 1972 年，116 頁，。印引用者。
39） M.E.W. Bd.4. S.144.『全集』第 4 巻 148 ～ 149 頁，。印引用者。
40） 南亮三郎『人口論』三和書房，昭和 29 年 101 ～ 102 頁。
41） 佐藤茂行，前掲書 346 頁。

Ⅱ．マルクス・プルードン問題の真相

マルクスとプルードンの決裂について筆者は，5 ツの原因があるものと考える。以下順次述べていくことにしよう。

1）まずプルードンがヘーゲル弁証法未消化という問題，（または，マルクスがプルードンに対して，ヘーゲル弁証法の理解が不十分であったとする点）である。

プルードンは『貧困の哲学』やそれ以前の財産にかんする論文を書く以前から「すでにカントとフィヒテの哲学を読んでいた。しかし彼にドイツ哲学特有の考え方を教え，彼をヘーゲル学派に導いたのは，パリにきていたドイツからの亡命者との接触[1]」だった。そのため 1840 年代の彼の著述には，弁証法の基礎である主体―客体に関する議論がぎっしり詰まってい

る。だが，とくに「マルクスを憤激させたのは，プルードンが『経済的矛盾の体系』(『貧困の哲学』) をヘーゲル流の図式で構成しようとした余り手際のよくない試み[2)]」だった。というのはマルクスは1865年1月24日付のフォン・シュヴァイツアーあての手紙で「1844年に，パリに滞在していた当時，私はプルードンと個人的な交際をむすびました。私がいまこのことを述べるのは，彼の "Sophistication" ——これは，商品にまぜ物をすることをさすイギリス人の用語です——については，ある程度まで私に責任があるからです。長々しい，しばしば終夜にわたった討論のあいだに，私は彼にヘーゲル主義を感染させましたが，これは彼にとって大害となりました。というのは，彼はドイツ語を知らなかったので，ヘーゲルの学説を本式に研究することができなかったからです。私が始めた仕事は，私がパリから追放されたのち，カール・グリューン氏がつづけました。おまけにこの男は，ドイツ哲学の教師としては，彼自身この哲学を全然理解していなかったという点で，私にいちだんとまさっていました。プルードンの第2の大著『貧困の哲学うんぬん』 ("Philosophie de la Misère ect.") が出版される直前，彼は私にたいへん詳細な手紙をよこして，自分でこの本の予告をしました。手紙の一節には，次のようなことばが読まれました。〔私はあなたの批判の笞(むち)を待っています〕 ("J'attends votre férule critique") しかし，この笞(むち)はさっそく彼のうえにうちおろされ（拙著『哲学の貧困，うんぬん』パリ，1847年で），その厳しさがわれわれのあいだの友情を永久に終らせてしまいました。以上に述べたことからおわかりでしょうが……彼は経済的カテゴリーの体系を弁証法的に叙述しようとしました。カントの解決不可能な〈二律背反〉のかわりに，ヘーゲルの〈矛盾〉が発展の媒介をするはずでした。彼の2巻にわたる浩瀚（こうかん）な著作の評価については，私の反駁書の参照をねがわなければなりません。私はそこでとりわけ次のことを示しました。すなわち，彼は，科学的弁証法の秘密をほとんど把握していないということ，他方，彼が経済的

カテゴリーを，物質的生産の一定の発展段階に照応する歴史的な生産諸関係の理論的表現と解さないで，先在的な永遠の理念に仕立てあげているのは，思弁的哲学の幻想をともにするものだということ，そして，こういう回り道して彼はふたたびブルジョア経済学の立場にたどりついているということ，です[3]」と弁明しているが，この手紙の内容からみると，プルードンがマルクスからヘーゲル弁証法を〈注入〉されたことになっているが，プルードンは1840年の『所有とは何か』でも弁証法を使っている。たとえば，第2部第1節「われわれの誤謬の原因について。所有の起源」をみると，「このすべ（術）を，ヘーゲルの定式で説明すると，こういうことになる。社交性の最初の様式，最初の確立である共同体は，社会発展の第1の名辞，テーゼである。所有は共同体の矛盾表現であり，第2の名辞，アンチテーゼをなす。残るのは第3の名辞，ジンテーゼを見出すことであり，われわれはこれを解決するであろう[4]」という具合である。本書の公刊は，1840年だから，マルクスが未だベルリン大学の学生だった頃，（マルクスの卒業は1841年3月30日），早くもプルードンはヘーゲル的弁証法を使っているわけだから，マルクスがプルードンにヘーゲル弁証法を〈注入〉した，ということはおかしい。長谷川進氏の解説によると，「当時のプルードンの『手帳』（カルネ）や数多い手紙にも，マルクスのことは出ていないというところから見ると，プルードンの方も，〔マルクスから〕特別の感銘は受けなかったのであろう[5]」と述べておられるし，さらに「ギュルヴィッチ（Gurvitch）も明らかにしているように，もともとプルードンの弁証法はヘーゲルとは別個であり，カントのアンティノミー概念とフーリエから受けついだ系列論（セリー）から成るものであって，アンティノミー弁証法または系列弁証法とよばれている。なるほど初期にはヘーゲル的口吻を好んでもらし，ことにマルクスから批判された『貧困の哲学』では，それが多いけれども，やがて反省し，それから離れて行った[6]」と述べているし，アルヴォンも「実際にはヘーゲルの弁証法とプルードンの弁

証法との間には本質的な差異（une différence essentielle）が存在[7]」している，とハッキリ断定している。

どんな差異があるか，といえば3ツの大きな違いがある。「第1に，ヘーゲル弁証法は正—反—合の3項が順次に生起されるのに対して，プルードンのそれはただの2項から成り，しかも2項が終始対立する。第2に，したがってヘーゲルではリズムの終りである第3項が，第1，第2項の〈綜合〉となるのに対して，プルードンでは2項が達する〈平衡〉(l'équilibre）で終る。第3に，もっとも重要なこととして，ヘーゲルでは〈理念〉が弁証法的プロセスに全く内在して自己を実現するのに対して，プルードンではかえって，弁証法の外で支配するなんらかの超越的な原理が認められている[8]」という大きな差異がある。プルードンのばあいでは，彼の〈系列弁証法〉は「つねに新たな対立項の出現によって発展してゆくものであるゆえ，本来的に対話的であり，個別的理性によって同化されるようなものではない。したがって，弁証法理性のように，個別的理性がそれを私的理性（党派性）として形成したり，超越的理性（絶対的真理）として世界を包摂したりするような仕組みにはなっていない[9]」のだ。だからプルードンみずから「アリストテレス以来の三段論法もベーコン流の帰納論も，更にまた古い弁証法も全てが無価値とはいえないまでも，少くとも慣習的で相対的な価値しかもちえない[10]」ものだと書いて「これまで伝統的に形成され遵守されてきた論理学上の諸カテゴリーの造り直しの願望を吐露[11]」しているくらいだから，ヘーゲル弁証法とプルードン弁証法とは本質的に違うものだ，と考えねばならない。そもそも「プルードンは不調和な(disparates)，異質的な（hétérogènes）なものの間の関係を，弁証法的関係と理解しており，かならずしも対立とか矛盾といった内容だけをそこで考えていたわけではない[12]」のだ。だから坂本教授は，プルードンの弁証法は「共有・所有・所持あるいは効用価値・交換価値・構成された価値（綜合価値）などの論理にみられるように，ヘーゲル弁証法と単に形式的に類

似しているにすぎない」[13]と述べ，さらに「プルードンの弁証法はフーリエに依存し，これにヘーゲル的用語をあてはめたもの」[14]にすぎず，フーリエ弁証法そのものは，エンゲルスの確言しているように「ヘーゲルに劣らない」ものだから「プルードンの弁証法がフーリエの弁証法に基礎をもつとすれば，これをヘーゲル弁証法をもって論難するマルクスの批判は，まさに的はずれ」[15]と述べている。要するに，マルクスの『哲学の貧困』における批判は「マルクスが主要な点で，プルードンの理論を読み違え，かつ，この理論体系の説明に欠かすことのできないプルードンの重要な論議をあえて無視した批判を展開」[16]していたものと考えざるをえない。つまりマルクスの誤解に原因がある。これが第(1)の理由である。

2）次に第(2)の理由として，マルクスの協力要請に対して，プルードンが保留条件をつけた。『哲学の貧困』は，このプルードンの非協力に対するマルクスの「怒りの表現」だと考えられる点がある。保留条件というのは，1846年5月のことであるが，「マルクスはプルードン宛に手紙を書き，通信委員会の目的をのべるとともに，〈ことフランスにかんするかぎり，あなたご自身にまさる通信員はみあたらないので〉パリ通信員になってくれないか，と頼んだ。追伸で，マルクスはプルードンにグリューン(K.Grün) に気をつけるようにいい，彼のことを評して〈知人を悪用する……山師 (charlatan)〉だ」[17]と追加した。これに対してプルードンはマルクスの企画に参加するのはいとわないといいつつ，いくつかの点で留保条件をつけて，次のように返事を書いた。「こういった条件がみたされるのであれば (on these conditions)，私は喜んであなたの協会に加入します。さもなければ——否。(otherwise …… no!)」[18]と。つまり「5月17日付のプルードンのマルクスあての手紙によると，プルードンはこの通信に参加することを承知したが，その場合に若干の保留条件をつけた。プルードンは，社会改革の手段として，革命的（政治的）行動でなく，政治を経済のうちに解消するための私的所有を徐々に経済的に解消するための方法

を考えている，とマルクスに伝える。また，目下半分印刷してある新書（『貧困の哲学』）で，自分の見解を詳しく知らせるという。このプルードンの返事をみて，政治的原則的見解の相違点を確認したマルクスは，彼との協力を断念する。したがって，5月17日のプルードンの返事を目安とすれば，この時点以降において，マルクスとプルードンとの友好関係がくずれていく[19]」といえる。とくにプルードンからの返事のなかの言葉，つまり，彼は「いまや経済学上の諸問題では〈ほとんど絶対的な反教条主義〉(fast absoluten Anti-Dogmatismus) にくみする……マルクスは彼の同国人のマルチン・ルター（M.Luther）の矛盾におちいってはならない[20]」というプルードンの手厳しい言葉が「2人のあいだに口をあけていた割れ目(Kluft)[21]」を拡大する誘因となったものである。もう少し真相を追及してみると「1844年から1845年にかけての冬，マルクスにはじめて会ったとき，プルードンはすでに著述や思想が多くの人びとの話題になっている，かなり名の通った人物であった。これに対して，マルクスは，いまだに無名の，世に出ようと躍起になっているドイツの急進的なジャーナリストにすぎなかった。マルクスは，プルードンが自分にどれほど役立つ人物であるかをすばやく見抜き，さまざまな国の社会主義者たちを通信によって連繋する組織――20年後にマルクスが創設することになるインターナショナルのはじめの兆候である――パリ代表として行動することをプルードンに勧めた。プルードンは余り気乗りがしなかった。彼は……マルクスという人物が共同の仕事に携わるには，いかにやりにくい人物かを悟っていたのであろう。事実プルードンがマルクスに宛てた返答のなかに，すでにふたりの相違がはっきり顔を覗かせている。〈もしもあなたが望まれるなら，社会を動かしている法則，それが実現されていく道筋，それを発見するに到る手続きを，ともに研究するにやぶさかではありません。しかし，すべての先験的なドグマを叩き潰しておきながら，今度は逆に我々が人々を教化しようなどと夢想することはやめましょう。あなたの国のルターが犯し

た矛盾に陥ってはなりません。ルターはカトリック神学を破壊しながら，逆に今度は，追放や破門という武器をもって，すぐにプロテスタント神学の構築にとりかかったのです。〉この見解は，やがて社会主義の歴史のひとつの特徴となる，フランスとドイツの労働運動の間にみられる姿勢の相違が表明された最初の機会であった。そしてマルクスとプルードンとの決裂は，のちに発生するマルクスとバクーニンの決裂の先駆けであり，ついに国際的な労働者階級の運動を永遠に分裂させることになるのである。マルクスはプルードンの協力を得ようとした，この試みについては『哲学の貧困』に含まれる全面攻撃をもって，プルードンに対した[22]」のであり，プルードンの協力がえられなかったことに対する忿怒を交えた報復なのである。だから，「マルクスは，彼の反駁書に〈哲学の貧困〉という題をつけた〔ばかりか〕，さらに確実に敵を打つため，フランス語で書いた[23]」くらいで，『哲学の貧困』はラッサールの言葉を借用すると，マルクスは「第1部では社会主義者になったリカード（als Sozialist gewordener Ricardo）として，第2部では経済学者になったヘーゲル（als Ökonom gewordener Hegel）として登場[24]」してプルードン攻撃を開始したのであり，要は，プルードンの非協力（原則的見解の相違による）に対するマルクスの報復措置と考えられる。これが第(2)の理由である。

3）第(3)に考えられることは，マルクスとプルードンの問題意識の共通性ということであり，しかもプルードンが「先取り」している点にある。ライバルに敵意をもつのは当然であるとしても——もともと「科学的社会主義」（socialisme scientifique）などという名称すら，じつは，プルードンが自分の社会主義を指して，〈科学的社会主義〉と呼んだのが始まりで，けっしてマルクスやエンゲルスらの造成語ではない。プルードンは，早くも1840年の『所有とは何か』のなかで次のように書いている。「かくしてある社会における人間の人間に対する権威は……ついには平等のうちに姿を消さねばならなくなるのと同様に，意志の主権は理性の主権の前に譲歩

し，ついには，科学的社会主義のうちに消滅するであろう[25]」と。だから，プルードンがマルクスに先んじて，「科学的社会主義」という言葉を使っていることがわかる。また『所有とか何か』のなかで展開されているプルードンの集合力（force collective）の理論を読めば，それがマルクスの「剰余価値論」の先駆だということが推定される。たとえば「資本家は労働者に日当を支払った，と人は言う。正確には，資本家は日々労働者を雇い入れるたびに，その日の日当を支払ったと言わなくてはならない。これはまったく同じことではない。なぜなら労働者たちの結合と調和，彼らの努力の集中と同時性との結果から生ずるこの巨大な力に資本家は少しも支払っていないからだ[26]」と述べたうえ，これまで「経済学者たちが，これに気づかなかったのは驚くべきことだ[27]」とさえ警告しつつ，集合力（force collective）にたいする資本家の〈不払い〉が，労働者の窮乏の原因であり，それが資本家による搾取のメカニズムとなる，と述べている。この点について，エミール・ジャム（Emiles Jamse）の解説によると「雇用者が被用者の一人一人に支払うのは，個別労働の生産力によって決定される賃金である。そして雇用者が収得するのは，協同労働のはるかに大きな価値である。すなわち利潤は種々の労働の結合によって，それに与えられる剰余価値から成っている[28]」ということだという。とすれば「剰余価値理論」はプルードンが創案したものといわねばならぬ。ふつう「剰余価値論」はマルクスがシスモンディ（Sismondi）やらロードベルトウス（Rodbertus）から借りてきたもののようにいわれることが多いが，どうも，マルクスが彼らから借りることのできたものはあまりないようである。そのうえ「マルクス主義の〈剰余価値〉（plus-value）がシスモンディの〈過剰価値〉（mieux-value）と共通する特質はあまりない[29]」ようで，ただ名称が類似しているというだけでしかない。ジャムは，「われわれは，プルードンが経済活動の機構のあるものを分析しようとしたことに対して，感謝の意を表さなければならない[30]」くらいだ，と述べ，たとえば「彼の資本利子に関す

る見解は……シーニョア（Senior）や J.S. ミルの見解と全く同じに，多少の分析的表現をもっていた[31]」と解説している。プルードンが「競争は競争の寿命を縮める」と述べたことも，漸進的な企業集中，独占傾向のもつ一般的特徴を早くも彼が予見していたものと考えられるから，彼の優れた洞察力を示すものであったと考えられる。

また国家死滅というテーゼについても，「国家死滅のテーゼは，プルードンが先行し，マルクスが追いかけたテーゼのもっとも目立った例[32]」だし，プロレタリアートの歴史的使命にしても，マルクスは「プルードンから近代プロレタリアートを唯一の現実的に革命的な階級（Proletariats als einzige wirklich revolutionäre Klasse）とする宣言（Proklamierung）をうけとっている[33]」のだし，つまりプルードンが先行し，マルクスが追いかけているのだし，「自由の実現」にしてもバクーニンの意見に従えば「プルードンはマルクスよりもはるかに自由を理解し感じていた（viel besser verstanden und gefühlt als Marx），〔ばかりか〕プルードンは教条や空想を売物にしなかった[34]」のだし，いずれにしろ「動乱と変革の時代に耐えたプルードンの理論的水準の高さ[35]」は認めざるをえないし，こう考えていくと「マルクスのプルードン批判が激しければ激しいほど，かえって反面において両者の問題意識の共通性を推測[36]」させるから，「先取り」されたマルクスがプルードンに対して，きびしい「批判の笞」を加えた理由が納得できる。つまり「プルードンはマルクスに先んじて，ブルジョア社会変革の原理を経済学に求め，しかもそれを，ユートピア社会主義と古典経済学とを批判的に止揚する自らの〈科学的社会主義〉の基礎原理たらしめようとした。……プルードンのかかる思想構造はマルクスのそれと多くの共通性をもっている。というよりマルクスの企図していた経済学批判体系を，プルードンはマルクスに先んじて，すでに構築していた，といってよい。そこからマルクスのプルードン批判のはげしさが生まれる[37]」のである。これが第(3)の理由である。

4）第(4)の理由として「政治勢力としてのプルードン主義との対決」の必要が生じてきたことである。「真正」社会主義者のカール・グリューン(Karl Grün）がパリで，（マルクスが去ったあと）プルードンの哲学の教師をしていた関係で——当然のことであろうが——「真正」社会主義の代表的人物たるカール・グリューンとプルードンとは親密になっていく。がんらい，「真正」社会主義（Der "wahre" sozialismus）という名称は「カール・グリューンが命名（taufen）した[38]」ものであるが，プルードンとグリューンが親密化していく事情は1846年9月18日付のエンゲルスからマルクス（在ブリュッセル）あての書簡で明瞭である。つまりエンゲルスは「こちらのドイツ人がプルードンのたわごと（Dreck）を信じているんだ[39]」とマルクスに伝えている。

当時のフランスの労働者たちは，大部分が小さな企業に雇われて労働しており，産業プロレタリアートというより職人であった。たとえば，「当時のリヨンは人口18万人，そのうち16万人が絹工業で生計を立てており，2万5000台の機械が動いていた。リヨンの絹工業はひっくるめて〈ファブリック〉と称されていたが，その実体は小さいアトリエの集合であり，大工場は極めて稀れ[40]」だったから，プルードンは「工場労働者あるいは純然たる賃金労働者を〈典型的〉な労働者であるとは考えない。かれのイメージを養っている労働者は，かれのいうアトリエ（仕事場）で親方とともに手工業的な労働にしたがい，数人あるいは，せいぜい数十人といった規模で協業し，出来高払いで賃金を受取る職人的労働者である。その場合，親方もまた広い意味での〈労働者〉のなかに含められるが，他方，無一物の労働者という意味での〈プロレタリア〉はプルードンのいう〈労働者〉のなかには含まれないこと[41]」になってしまう。そうすると，生産者の「自由な協同社会」をつくり，「占有を保持しながら」労働者の窮乏化を阻止する，というプルードンの構想は，むしろ職人たちの利益とピッタリ合致するから，パリなどですら，プルードン主義が拡っていくのは当然

なことであった。つまり「パリで〈プルードン教〉(Proudhonistery)が急進的労働者のあいだで急速に拡まっていく[42]」のは当然のことなのである。しかしマルクスは当時，まだ無名の一亡命者にすぎず，プルードン主義が拡まっていく報告を聞くことは我慢ならぬことであったと考えられる。

前にも述べたように，「真正」社会主義は「フランス社会主義の諸要素に〈真の〉純粋に人間的な本質にかんするフォイエルバッハの思想を接木(graft)したもの[43]」であって，つまり「フォイエルバッハ哲学を基礎にして，プルードンの所有論を社会主義の〈真理〉たらしめようとする[44]」ものだから，——すぐ気付くように——この「真正」社会主義とプルードンの結びつきである。メーリングは「マルクスとエンゲルスが〈真正〉社会主義者の代表中カール・グリューンを最もはげしく攻撃したのは，彼がいちばんぼろを出したからだけでなく，彼がパリに住み……プルードンにおもしろくない(verhängnisvoll)影響をあたえたからだ[45]」と説明しているが，「真正」社会主義者とプルードンが親密化している実情がよく納得できよう。ともかく，「真正」社会主義思想がフランスやベルギーのドイツ人の間で急速に影響をもち始め，伝播拡大していく傾向を示し始めると——これはプルードン主義が拡大していくことだから，マルクスとしては独自の理論体系を提示する必要に迫られていく。当時のマルクスの立場になってみると，マルクスはマックス・シュテイルナーからも，「真正」社会主義者からも批判されている立場におかれているということになる。周知のように，シュテイルナーは，1844年末に『唯一者とその所有』を書いて「単独者の実存」の立場からマルクスを批判していた。だからマルクスは，シュテイルナーからも，「真正」社会主義者からも批判される立場におかれてしまっていた，ということになる。だからマルクスは「シュテイルナーからの攻撃のうちに，プルードンの所有論がからんでいることを認め，真正社会主義者からの攻撃のうちにも，また，プルードンが問題とされて

いることを認め[46]」て，どちらにしても，プルードンがからんでいるとみた。そこで，マルクスはプルードンに痛烈な〈批判の笞〉をくわえて，批判的勢力を叩き，その拡大を防止せざるをえなかったのである。これが第(4)の理由である。

5）第(5)は，ブルーメンベルクの指摘している心理学的分析の問題である。つまり「マルクスには思想的特徴は何も見いだされない。だがおそらくは性格学的な特徴（charakterologische Züge）といったものはいくつかあろうし，そうした特徴がしばしば指摘されてもなんら不当ではない。それらの特徴とは……マルクス自身が1851年8月25日のエンゲルスへの手紙で〈共産主義者無謬の誇り〉（Kommunistenstolz der Unfehlbarkeit）を高い徳だと賞賛したように，排他性（Ausschliesslichkeit）や無謬性の要求（Unfehlbarkeitsanspruch），そしてさらにファナティズム（Fanatismus）[47]」という特徴がみられる点である。これらの「排他性」「ファナティズム」こそ，数多い論敵を作っていったものであり，――プルードンはほんの1例にすぎず――だからマルクスの論敵は，じつは「マルクスの理解しがたい，捉えられた状態（seine unbegreifliche Bessenheit）[48]」なのだと説明している性格的な問題である。つまり，マルクス・プルードン問題の本当の敵は，じつはプルードンではなくて，マルクス自身の性格に由来するものなのであって，「誰も自分に耳を借そうとしない」（noch niemand auf ihn hören wollte）のに，自説の〈無謬性〉を誇示するユダヤ人特有の性格に根ざしているのだという。だからマルクスのプルードンに対する〈批判の笞〉（férule critique）は「何よりもまず〈自己憎悪〉（Selbsthasse）の典型的な現われ[49]」であり，「それ自体反ユダヤ主義（Antisemitismus）の産物[50]」なのだ，と説明する。つまりマルクスがプルードンに加える〈批判の笞〉こそ，マルクスが己れ自身に加えている笞と解釈すべきものであり，それこそマルクスの「ユダヤ人としての」自己嫌悪（Selbsthasse）の典型的な表現と解釈すべきものだという。マルクスは

どの人物が，こうした弱点を生涯の終りまで克服できなかったことは，むしろ不思議なくらいであるけれども――マルクスは，「自分をユダヤ人(Juden) と呼んだ相手とは，とくに激しい闘いを交えた」[51]のであり，「自分をユダヤ人と呼んだ相手を許すことはなかった」のであって，その1例がプルードンだ，として，性格学的な性向（癖）(charakterologische Züge) に因するものと説明している。だからマルクス・プルードン問題についていえば，「この2人の著者の間の対話は，理論的見解が全く離反 (complete divergence) しているばかりでなく，また――そしておそらく，この方がもっと重要なことであったが――2人の人格の和解しがたい対立 (irreconcilable opposition of personalities) を示す」[52]ものといえる。周知のように「コンプレックス→アグレッション」は心理学の公式であり，「自分をユダヤ人と呼んだ」論敵に対する攻撃は――ユダヤ人としての自己嫌悪が強ければ強いほど――論理そのものの批判どころか，激しいアグレッション的行動に代るものだから――痛烈な揶揄（やゆ）と罵倒（ばとう）の交錯した，激しい〈批判の答〉に代ったものであろうと考えられる。これが第(5)の理由である。

注 1） ジョル，前掲書67頁。
2） 同書，67頁，。印引用者。
3） M.E.W. Bd 16. SS.27－28.『全集』第16巻25～26頁，傍点原著者，。印引用者。
4） プルードン「所有とは何か」(『プルードン』Ⅲ，前掲書，274頁所収)
5） 長谷川進解説，同書306頁，。印引用者。
6） 同上306頁，。印引用者。
7） H.Arvon. L'anarchisme, (Collection Que Sais-Je? NO.478), pp.44－45. 邦訳63頁（クセジュ文庫版）
8） 橋本峰雄「プルードンとキリスト教」(『プルードン研究』前掲，345頁所収）。印引用者。
9） 竹内成明，前掲論文258頁，。印引用者。
10） 今村仁司，前掲論文223頁，。印引用者。
11） 同上223頁。

12） 佐藤茂行，前掲書 132 頁，傍点原著者。
13） 坂本慶一，前掲書 151 頁，。印引用者。
14） 同書 152 頁，。印引用者。
15） 同書 153 頁，。印引用者。
16） 佐藤茂行，前掲書 337 頁，傍点原著者，。印引用者。
17） D.McLellan, Karl Marx, op.cit., p.159. 邦訳 155 頁。
18） ibid., p.159. 邦訳 156 頁。
19） 森川喜美雄「アンネンコフへの手紙」(『マルクス・コメンタール』Ⅲ. 現代の理論社，1975，77 頁）。印引用者。
20） F. Mehring: Karl Marx, Dietz Verlag Berlin, 1979, S.130. 邦訳 218 頁，。印引用者。
21） ibid., S.130. 邦訳 218 頁。
22） ジョル，前掲書 69 頁，。印引用者。
23） Mehring, op.cit., S.131. 邦訳 221 頁。
24） ibid., S.132. 邦訳 222 頁。
25） プルードン「所有とは何か」前掲書 219 頁，。印引用者。
26） 同書 141 頁，。印引用者。
27） 同書 141 頁。
28） エミール・ジャム『経済思想史』久保田・山川邦訳，岩波書店，昭和 42 年，210 頁，。印引用者。
29） 同，256 頁。
30） 同，210 頁。
31） 同，210 頁。
32） 西川長夫，前掲論文 139 頁。
33） K.Korsch: Karl Marx, Europäische Verlagsanstalt, 1967. S.205. 邦訳 311 頁。
34） F.Mehring, op. cit., S.408. 邦訳（Ⅲ）32 頁，。印引用者。
35） 西川長夫，前掲論文 97 頁。
36） 坂本慶一，前掲書 117 頁。
37） 同書 169 頁，。印引用者。
38） F.Mehring, op. cit., S.122. 邦訳 206 頁。
39） M.E.G. Briefwecksel Bd1. S.42.『全集』27 巻 48 頁。
40） 河野健二，前掲論文 9 頁。
41） 同上 8 頁。
42） Woodcock, op. cit., pp.123－124. 邦訳 173 頁。
43） D.McLellan, op. cit., p.150. 邦訳 145 頁，。印引用者。
44） 森川喜美雄，前掲論文 72 頁，。印引用者。

45） F. Mehring, op. cit., S.123. 邦訳 208 － 209 頁。
46） 森川喜美雄，前掲論文 73 頁，。印引用者。
47） W.Blumenberg, op. cit., S.78. 邦訳 96 頁。
48） ibid., S.78. 邦訳 96 頁。
49） ibid., S.58. 邦訳 72 頁。
50） ibid., S.58. 邦訳 72 頁。
51） ibid., S.58. 邦訳 73 頁。
52） Woodcock, op. cit., p.121. 邦訳 169 頁，。印引用者。

むすびにかえて

以上で明らかなように――筆者はマルクス・プルードン問題をとりあげて論じた。小論Ⅰでは，マルクス・プルードン問題発生直前までの両者の思想形成にかんする比較をおこない，Ⅱでは，マルクス・プルードン問題の原因究明を 5 ツの方向から分析し解明してみた。

こんにちプルードン死後，約 115 年余になる。(注．プルードンは 1865 年正月 19 日午前 2 時没)。これまでマルクス・プルードン問題といえば，「マルクスによるプルードン批判の理由と意味，プルードン側の事情と問題意識などを多少とも顧りみることさえしないで」「マルクスの尻馬にのって」(河野健二氏)，マルクスの側からのみ一方的にプルードンを論ずることが普通であった。そこで小論では，プルードンとマルクスを同じスタート・ライン上において対比しつつ，比較検討してみた。その結果，**a**）まず，問題意識において，マルクスとプルードンには多くの共通性があるが，プルードンには，その発想において先駆性が認められ，マルクスを「先取り」していた多くの事実を確認し指摘することができた。確かに E.H. カーのいうように「プルードンがよろめきながら進んで行ったところへ，後からマルクスはついて行った。プルードンは，マルクス主義（科学的社会主義）体系のこの中心挺子の発明者であった」ものと考えられうる。プルードンがマルクス主義体系の中心テコの発明者であったというこ

とは，プルードンが極めて優れた思想家であったというばかりでなく，現実的思想家であってユートピストではなかった，ということにもなる。**b**）マルクスのプルードン批判は全く「的（まと）はずれ」であったということ。つまりマルクスの『哲学の貧困』は，形式的には確かに「プルードンの批判であるには違いないが，実際には，プルードンを手がかりにしたマルクスの別個の著作と言うべきであり，両方を並べてみると，両者は奇妙な仕方で一致し，かつ，すれ違う」（陸井四郎氏）ものであるということ。**c**）プルードンが1846年5月17日付でマルクスにあてた手紙で示されている反教条主義の表明，それから「革命よりも改良を」という対立路線の提示，とくに，――「アプリオリな教条主義をすべて片づけたあとで，今度はわれわれが人民を，教義によって洗脳するというようなことだけは考えないようにしましょう」というプルードンの教訓は，プルードン没後，115年余の長い歴史の歩みにもかかわらず，――こんにちのわれわれにまことに示唆ぶかいものがある。その意味で，マルクス・プルードン問題は，現代のわれわれに直接的・現実的な問題であると感ぜざるをえない。以上の **a**)，**b**)，**c**)，3点の確認をもって，小論の結論に代えたいと思う。